

【研究ノート】

「実践哲学」の展開*

岡部光明[#]

2020年5月

【概要】

近年、自己啓発に関する関心が高まっている。それに関する様々な書物のうち、現代性と発展性という観点から注目される一つの実践哲学（高橋 2018a, 2019a ほか）の書物があることを別稿（岡部 2020a）で指摘した。本稿では、その実践哲学の体系と実践論がこれまで研究者によってどう理解され、評価され、そして先行きが予測されてきたかを先ず振り返った。次いで、その実践哲学が近年どのような展開をみせてきたかを追跡するとともにその理由を考察した。

主な論点は次の通り。（1）この実践哲学は、明快さ、体系性、そして研鑽方式の柔軟性などが 1990 年代半ば以降研究者によって評価され、将来発展が見込まれるとする見解が多くみられた。（2）その後、そこに心理学など科学の成果が取り込まれることによって内容の明確化、体系化がさらに進むとともに、オンライン研鑽システムが大規模に導入されるなど進化を続けている。（3）個人主義傾向が強い現代人は、霊的な成長（生きる動機の追求やその実践、人間や世界の根源的理解など）を希求しつつも、それを集団的に追求する場合が多いとされる宗教は敬遠する（その反面スピリチュアリズムを好む）傾向がある。（4）一方、この実践哲学は人間への視野が広く宗教の要素を含むが、標榜する価値、研鑽の体系と方式、組織運営などの面で現代人の嗜好によく合致している。（5）したがってこれは「間口が広く敷居の低い現代的宗教」という理解が可能である（現にその賛同者・実践者が着実に増加している）。

キーワード： 自己啓発、人格の4類型、自分を知る力、自己実現、宗教、スピリチュアリズム

* 本稿は、一般に利用可能な書籍・研究論文・資料等をもとにした筆者独自の分析であり、実践哲学を推進する組織の見解を表わすものではない。なお、ここに含まれる意見やありうる誤謬は全面的に著者に帰属する。本稿は、岡部（2020a）を補完する研究ノートである。

[#] 明治学院大学国際学部附属研究所名誉所員、慶應義塾大学名誉教授。 <http://www.okabem.com/>

はじめに

近年、価値観が多様化するなかで自己啓発に対する関心が高まっており、関連書籍の刊行も盛行している。こうした自己啓発書のうち、代表的なものを5点採り上げて別稿（岡部 2020a）でそれぞれの要点を紹介した。本稿では、それらのうち特に現代性と発展性という観点から注目される一つの実践哲学に焦点を絞って考察する。

以下、1章「『実践哲学』の概要と特徴」では、この実践哲学の基本的な特徴をまず簡単に要約する。2章「研究者による評価と将来予測」では、今からおよそ15～25年前に何人かの宗教学者¹によってこの実践哲学がどのように評価され、どのような将来展開が予想されていたかを辿る。3章「最近の多面的展開と高度化」では、そうした予測がその後、具体的にどう展開してきたかについて幾つかの側面をみる。最後の第4章「発展の理由」では、現代社会の潮流を踏まえた場合、人間の生き方の探求において求められる要件（スピリチュアリティや各種の要請）をこの実践哲学がどう満たしているかを論じる。なお、本稿の記述は、全て一般に入手可能な書籍・研究論文・各種資料等に基づく分析である。

1. 「実践哲学」の概要と特徴

実践哲学とは、一般に「人間の実践を研究の対象とし、さらに実践の上での指針を与えようとする哲学」（大辞林 第3版）を指す。それは理論哲学と対照をなすものとされる。しかし、本稿で扱うのは、こうした一般的な意味での実践哲学ではなく、高橋佳子氏²によって長年展開されてきた思想ないし哲学そしてその実践論である。その最近書籍としては、高橋（2018a, 2019a など）がある。

高橋は、自らの発想や主張を展開する場合、独自の表現や名称を用いる場合が多い。すなわち、その体系全体としては、本稿での実践哲学³という呼称のほか、魂の学⁴、

¹ 宗教学あるいは宗教学者については、時々誤解があるのでそれを解いておきたい。宗教学は、宗教が「如何にあるべきか」を問う神学や宗教哲学のような思弁的学問ではない。それは、研究対象とする宗教が（1）かつて如何にあったか、（2）いま如何にあるか、を問う経験科学的な学問である。それは、世界中の諸宗教を自然科学の方法を用いて真に科学的に（実証的・価値中立的に）研究する研究領域である（鎌田 2016：245）。

² 以後、学術論文の慣例に従い敬称は省略する。

³ 高橋（2016:20）、GLA(2016:10)。

⁴ 高橋（2019a：22）、GLA(2016:10)。

神理の体系⁵、トータルライフ人間学⁶、TL人間学⁷などの表現が用いられている。しかし本稿では、高橋が展開してきたそれらの呼称を便宜上、統一的に「実践哲学」と表現することにする。

なお、高橋は「新しい世界を理解し体験するためには、新しい言葉が必要」（高橋 2019a : 54）として独自の概念と用語を積極的に開発し、書物においてもそれらを多用して説明が行われている（これらの新しい用語ないし用法は幸い全て明確に定義されている）。ただ本稿では、高橋の意図を尊重しつつも、できるだけ一般的な用語を用いて以下記述することとしたい。

この実践哲学の基本視点

高橋は、自らの人間観、世界観を「魂の学」と規定している（高橋 2018a:50）。そして、それは「物質的な次元を扱う科学を代表とする“現象の学”に対して、物質的な次元とそれを超える、見えない『心』と『魂』の次元も合わせて包括的に扱おうとする」ものと特徴付けている（高橋 2018a:50）。ここで魂とは、心の深奥に広がる「智慧持つ意思のエネルギー」と定義され、人間は永遠の生命を抱く魂の存在である（高橋 2019a:22）と捉えられている。

このような「魂の学」は「理論と実践の体系です。それは、唯物的な生き方でもなく、精神論でもない。一貫して、目に見える現象と見えない精神の融合をめざす実践哲学です」（高橋 2016:19-20）と特徴付けている。

一方、高橋は、経営・医療・教育・アート・音楽・法務などの専門分野において研修セミナーを設けている。そこではこの実践哲学が「トータルライフ人間学」と称され、「TL（トータルライフ）人間学は、人間の本質を魂と受けとめ、人間と世界を貫いている普遍的な法則に基づく実践哲学です。それは、魂が抱く元々の願いと、人生、そして日々の仕事や生活をトータルに捉え、人間と世界の可能性を最大限に発揮するための叡智でもあります」⁸と表現されている。

⁵ GLA(2016:10)。

⁶ 高橋（2000 : 223）のほか、高橋の思想を専門分野（経営・医療・教育等）で活かすことを学ぶ「第3次 The Gate Series Seminar」（2019年12月から2020年7月に各1泊2日で3回実施、トータルライフ総合事務局主催）の案内リーフレット。

⁷ 脚注6と同じ。

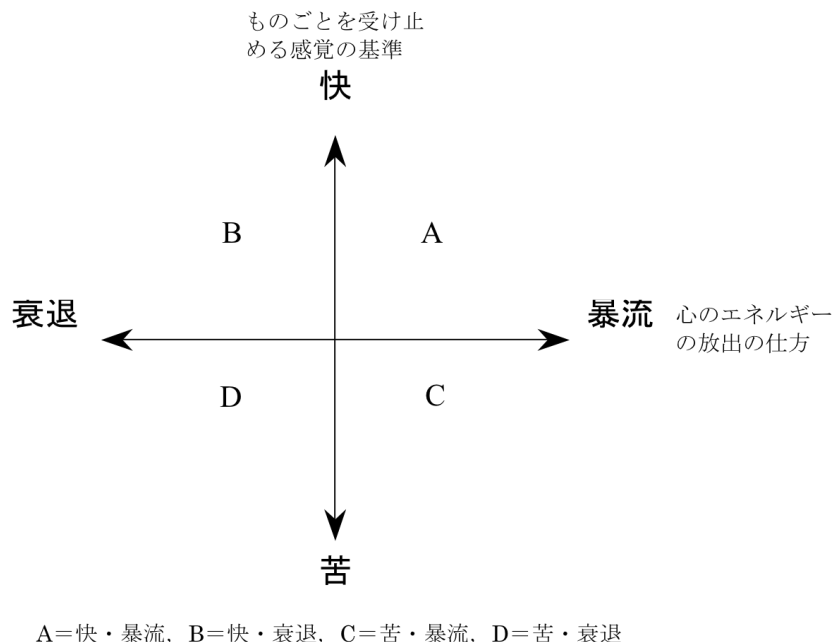
⁸ 「第3次 The Gate Series Seminar」（前出脚注6を参照）の案内リーフレットにおける記載。

この実践哲学の概要

この実践哲学は、具体的にどのようなものか、その特徴はどんな点にあるのか、そしてこれまでにどのような結果をもたらしてきたのか。これらは別途やや詳細に記述した（岡部 2017 : 12 章および 13 章）ので、ここではその概要を先ずごく簡単に整理しておく。

第一に、人間（人格のタイプ）は4つの類型（**図表 1**）によって理解できるとしていることである。すなわち、人間がものごとを受け止める感覚の基準として「快か、苦か」（肯定的に捉えるか、否定的に捉えるか）という一つの座標軸を設ける。一方、心のエネルギーの放出の仕方として「暴流か、衰退か」（激しい流出か、勢いの喪失か）という別の次元を設定している。そして、人間に現れる考え方と行動は、誰の場合でもこの二つの座標軸を組み合わせることによって出来上がる4種類のうちいずれかの傾向を持つ、という理解がなされる。

図表 1 人間の思考および行動における 4 つのタイプ



（注）高橋（2008 : 183 ページ，2009 : 1015 ページ）に多少追加記載。
（出所）岡部（2012）図 4、および岡部（2017）図表 13-2。

このような「4つのタイプ論は、およそ人間が抱くあらゆる『闇』を的確に見抜き、捉えることのできる、非常に有効な座標である」（高橋 2010 : 196）としており、「そ

それは煩悩⁹を超えてゆくためのガイド、地図であるということから“煩悩地図”と呼んでいる」（同：196）。重要なのは、人間は誰でも無意識のうちにここで示される4つの要素（A～D。人によってどの要素が最も強いかは異なる）を持つこと、そしてその事実自体を見破る必要がある、という点である。こういう認識が、この実践哲学の出発点となる。

第二に、人が4つの煩悩のうち特に強く持つものを発見ないし自覚する方法、そこから脱出する方法、そして脱出した心を持ってものごとに対処してゆく方法がいずれも具体的に提示されていることである。すなわち、そのためにはセミナーへの参加や書写行などが誘われているほか、止観シート¹⁰、ウイズダム・シート¹¹、カオス発想術¹²といった具体的なツールが開発され、提供されている。この点において、この実践哲学には明らかに「実践性」がある。

ただ、人が持つ上記の煩悩ないし宿命（誰もが背負う人生の重荷）からの脱却は容易なことでない。このため、この実践哲学を実践して成功した人々の具体的な取組みとその結果を「運命の重力圏を脱出する」（高橋 2016：45-98）、「慣性力という運命を超える」（同：99-154）などの表現とともに詳細に、そして多数提供している。

第三に、上記のような取組みを行うことによって人格が変わり、人生航路を大きく転換しただけでなく、それによって個人の使命を果たすことになった実例が非常に多くみられることである。その場合、先ず個人として自由ですがすがしく、エネルギーで忍耐強く、慈しみと包容力に満ちて、謙虚さを失わない自分¹³が現われることになる（高橋 2008：7）。それにとどまらず、本当の人間力（魂の力）を発揮してそれぞれの使命（人生の仕事）を果たすことによって、社会全体としていろいろな問題を草の根レベルで解決してゆく大きな力になる。そうした具体例の要点を、一覧表に取りまとめて**図表 2**で提示した¹⁴。

⁹ 仏教用語。身心を乱し悩ませ智慧を妨げる心の働き。

¹⁰ 日々あるいは刻々と揺れ動く心を自覚的に止めて観るためのワークシート。

¹¹ 自分が本当に（本心から）願っていることを明らかにし、問題の解決や新たな創造を成し遂げるためのワークシート。

¹² まだ何も形になっていない状態（カオス）の中には、あらゆる可能性と制約が孕まれていると捉え、そこから光の現実を結晶化するという考え方とその方法。

¹³ これらは幸せ（エウダイモニア）を構成する要素ということができ（岡部 2017：235-238）、幸せを達成した状態を表すといえる。

¹⁴ この表に先立つ7名（A氏～G氏）の事例は、同様の表形式によって別途提示した（岡部 2017：図表 13-8, 420-421）。

魂の力を自ら引き出し、使命を達成するようになった人には、共通する輝き、オーラとでも呼ぶべき気配がある（高橋 2015 : 61-67）。それは (1) ブレない中心軸（意思を貫き通す力）、(2) 目的志向（自分が願ったことを成就することへの深い関心）、(3) 人間・社会・自然・世界に対する深い共感、(4) 未来からのビジョン（自らの内に生まれた直感、時には自分を越えた存在からの啓示）、(5) 人格の光（明るさ、元気さ、正義感、誠実さ、受容力などの人格的な魅力）、などが第三者によって感じられることである（同 : 61-67）。

この実践哲学の特徴

以上で概観した実践哲学は、人間の生き方と世界のあり方に関して、次のような5つの特徴を持つと理解できよう（岡部 2017 : 13 章 5 節）。

第一は「体系性」である。主要な用語は全て明確に定義されているほか、「魂一心一現実」のつながりについては原因と結果の法則（因果律）に基づく理解がなされており、論理的、合理的である。さらに人間観と世界観の両方を含む大きな認識体系を構成していることも特徴といえる。

第二は「先端性」あるいは科学性を持っていることである。ここで示された人間の感覚や行動は、基本的に心理学に立脚している点で、先端の科学的成果が生かされている。現在、自己啓発の領域において一つの主流となっているのは、オーストリアの心理学者アルフレート・アドラーが 20 世紀初頭に創設したパーソナリティに関する新しい心理学（アドラー心理学）であるが、この実践哲学の枠組みは、それと本質的に同じものである（岡部 2017 : 425-426）。すなわちアドラーは、人間の知覚体系（知覚・判断・行動の仕方。つまり生き方のスタイル）は人生の早い時期に形成され、それが不適切なものであったとしても簡単には放棄できないこと、しかし大きな努力をしてそれを変えてゆくことが人間の責務であること、を強調している。高橋による実践哲学は、アドラー心理学のこのような基本認識を継承している¹⁵。

¹⁵ アドラーのいう、知らず知らずのうちに身につけた「生き方のスタイル」(style of life) は、高橋の場合「三つの『ち』」に該当する。血とは、両親や家族から流れ込んでくる考え方や生き方・価値観であり、地とは、地域や業界から流れ込んでくる考え方や生き方・慣習や前提、そして知とは、時代から流れ込んでくる考え方や生き方、知識や常識、価値観である（高橋 2019a : 42）。

図表2 自己の変革が仕事や働きを介して周囲や社会を変革した事例

氏名	職業	経歴	個人の自己変革	左記に伴う周囲・組織・社会の変革
H氏	総合内科医師、地域医療連携センター長	自分第一主義と正論で周囲に対応したため軋轢が常態化、次々と病院を転籍。	・患者に対しては命令口調、院内関係者に対してはことある毎に口論・対立する日常。 ・自己鍛錬により心を変えることができ、患者の心の中にある痛みや苦しきまで受止めることが可能になる。	・患者ファーストの姿勢を徹底した結果、人と人、病院と病院、病院と地域をつなぐことこそ自分の使命であることを発見、現在は地域医療連携の責任者として活躍。
I氏	経営者（ホームセンター・チェーンの会長、92歳）	1980年代、まだ日本にホームセンターがなかったころそれを設立、現在は売上シェア全国1位。	・当初は、設立したホームセンターを大きくしたい、という発想が中心。 ・これまで40年近く実践哲学に接してきたことにより、その動機は社会に貢献したい、人間を目的とした経営をしたい、という願いに自らの命を使うことであることを一層自覚。	・プロの職人対象の専門店チェーン（生涯現役、定年なしの会社）を83歳で創業。会社の業態がユニークであるうえ、雇用に対する考え方も超高齢化社会を迎える日本にとって先駆的。
J氏	主婦	両親が再婚同士で異母兄弟のいる複雑な家庭環境のなかで成長。	・子供時代から消極的で引込み思案な性格。運動も苦手。2008年、列車をホームで待機中に胸の痛みで襲われ線路上に転落。 ・列車に轢かれたまま携帯電話で夫と娘に連絡（その姿に救急隊員が驚駭）。これは実践哲学を学んできたことにより、自分が最も大切にすべき生き方が心深くしみ込んでいたため。	・命を取り留めるため、左足のヒザから下を切断することを余儀なくされ、以後は義足をつけてリハビリ。試練を泰然と受止め、自己ベストを生きる。1年後の障害者競技大会に出場、背泳ぎと自由形で金メダルを獲得。
K氏	環境科学者	環境問題がライフワーク。ここ20年はダイオキシン、廃棄物処理、ゴミ問題の研究に取り組み。	・東日本大震災に際して、ゴミの焼却場と火力発電所を一つにするというアイデアを着想。しかし、本人は無意識のうちに固定化した見方にとらわれていたため、容易に具体化できず。 ・事態の可能性と制約を見極めるうえで有効な「見」から「観」へというまなざしを実践哲学者（高橋佳子氏）から示唆され、青写真を描き直して挑戦。	・着想を実現するうえで市や県を動かすことができ「21世紀のごみ処理施設のモデル」といえる今治市クリーンセンターが完成、2018年3月に稼働開始。
L氏	愛知県議会議員	4歳の時、父親が交通事故で死亡。母子家庭という厳しい条件、そして就職後は男女差別に直面。	・選挙事務所の手伝いをしていた時、予定候補者が病気で不出馬となったため、27歳で県議会議員候補に推されて初当選。 ・高校2年のとき高橋佳子氏の講演会に参加、その後20年余を経て実践哲学に再び出会い、自分の人生の仕事は女性や弱者が安心して輝ける社会の実現であることを確信。	・公共施設での授乳室設置、県の男女共同参画推進条例の制定、県の審議会等での女性登用推進、LGBT（性的マイノリティ）の人権を守る運動の推進など、対話者・同伴者としての政治家として大きな業績。愛知県議で女性初の永年在職者として顕彰。
M氏	歯科技工士	1歳の時の病気が原因で聴覚を喪失。障害者として苦しみ、不自由な人生。	・両親に対して被害者意識を募らせ、ついに憎むまでになった。 ・手話サークルの世話をしていた女性と結婚、それによって実践哲学に出会う一方、母がいかにも自分のために尽くしてくれていたかを発見。	・その後は歯科技工士をする一方、障害を抱えて生きてきた自分だからこそ伝えられることがあるとして、自分の心を変える道があったとする体験談の講演会にも積極的。
N氏	歌手	子供時代から飛び抜けた歌唱力。やがて中尾ミエ、伊藤ゆかりとともに三人娘を結成。NHK紅白歌合戦にも連続出場。	・父親は面倒ばかり持ち込んでくる一方、業界では特別待遇されるため、なぜ歌を歌うのかわからないという焦燥感。 ・実践哲学の学び方の一つである「プロジェクト研鑽」に参加、その結果、父やスタッフと心から通じあえる関係になり、自らの内側の力を引き出して人生を取り戻した。	・父への長い介護・見取りと乳ガン体験も経て、本心から人間の喜びと悲しみを歌いたい、という歌唱に転換、聴衆を感動させている。

- (注) 1. 上記各氏の具体的氏名は、H氏は池田啓浩、I氏は鏡味順一郎、J氏は大山敏恵、K氏は脇本忠明、L氏は中村友美、M氏は松橋英司、N氏は園まり、の各氏を表わしている（いずれも実在の人物）。
2. 上記M氏の小学生時代の言語習得の歩みは1958年から3年間、8回にわたってNHKラジオのドキュメンタリー番組「あるろう児とその母の記録」で紹介された。またN氏のガン体験とリハビリ、介護の歩みは2016年にNHK教育テレビ「ハートネットTV」で取り上げられた。
3. 高橋佳子『未来は変えられる！』（2015）、同『運命の逆転』（2016）、同『あなたがそこで生きる理由』（2017）、同『最高の人生のつくり方』（2018）の記述をもとに著者が一覧表を作成。

(出所) 岡部（2019：別紙2）。

また、この実践哲学は、人間の幸福ないし善い生き方 (well-being) として「魂の力」の開放、つまり人間の潜在能力を顕現化することを重視している。この点にも先端性がある。というのは、人間にとって従来（とくに経済学で）重視されていたのは財や所得 (resource)、あるいは財産の利用から得られる効用 (utility) であった。しかし、1980 年代後半、アマルティア・セン¹⁶は人間の潜在能力 (capabilities) こそ、それに該当するという新しい理論体系を提案した (岡部 2018: 1~3 章)。つまり、魂の力を開放するという発想は、センが展開した人間の潜在能力の開放に他ならず、したがってこの実践哲学は、学問的にみても新しい発想を含んでいる (先端性がある) といえよう (同: 4 章)。

さらに、この実践哲学では、個人の行動が変化することによって個人の仕事ないし使命の果たし方が転換し、その結果として社会全体がより良いものになるという立論がなされている。「GLA [高橋が主宰する実践哲学推進組織]¹⁷ の願いは『自己の確立』と『世界の調和』」 (GLA 2014:6) この二つであることが強調されている。一般に、自己啓発に関する書物等では、この二つのうち前者のみが目的とされ、後者に言及がないものも多い。その点、GLA の哲学はより一般性があり優れたものになっている。このように個人の行動とその変化をもとにして社会を理解する方法は、社会科学において「ミクロ的基礎を持ったマクロ理論」と称され、学問として望ましい (先端的な) アプローチとされているので、GLA (ないし実践哲学) の発想はその点でも現代的である¹⁸。

第三は、実践哲学という名称が示唆するとおりの「実践性」を持っていることである。つまり、高橋による定期的な講演会 (全国主要都市に衛星中継される) や専門職分野のリーダーを対象としたセミナーが定期的開催されているほか、国内 109 か所と海外 6 拠点をインターネットでつないだ研鑽の場 (毎週 1 回実施) が設けられている¹⁹。

¹⁶ インド出身の経済学者、米ハーバード大学教授。1998 年にノーベル経済学賞を受賞。

¹⁷ [] 内の語句は、著作等を引用する場合、文意を明確にするために筆者 (岡部) が挿入した文言であることを示す。以下同じ。GLA については、脚注 21 を参照。

¹⁸ ちなみに経済学においては、従来、ミクロ経済学とマクロ経済学はほとんど接点をもたないままそれぞれに発展してきたが、近年では両者を理論的に統合する研究が活発化し「マクロ経済学のミクロ的基礎付け」あるいは「ミクロに基礎を置くマクロ経済学」といった研究が重視されている (岡部 2017: 12-13)。

¹⁹ 『G.』 (GLA 総合本部出版局編集月刊誌) 2020 年 2 月号 62-69 ページ。なお、2020 年春の新型コロナウイルス問題の発生に伴って政府から各種集会の自粛要請が出されたため、3~4 月以降、GLA が主催するこれらの集会の大半に関しては、参加者の自宅等からオンラインでのライブ中継参加す

また自己鍛錬のため、止観シート、ウイズダム（先智慧シート）など実践的なツールが開発され、広く活用されているのは前述したとおりである。

第四に、この実践哲学は多くの実践者によってその有効性が確認されているので「実証性」を持つことである。高橋の書物においては、前述したとおりその実例が豊富に掲載されている。そしてそうした実践は、個人がその人の本来の生き方（使命の達成）によって幸せ (well-being) を実現しているだけでない。人格を変えた結果、組織や社会のあり方も望ましい方向へ変えることにつながっている（前掲**図表 2**）。このように実証性が多面的に示されているのが見逃せない特徴といえる。

そして第五に、この実践哲学は周囲や社会を変えてゆく力、すなわち「社会変革力」を持つことを指摘できる。この点は、上記の実証性に関連して指摘したことでもあるが、それとは独立した特徴の一つとして挙げる必要がある。なぜなら、他の自己啓発書ではその主眼が専ら個人の幸せに置かれている（その段階で止まっている）のに対し、この実践哲学では、個人の幸せ達成（使命の遂行）がより良い社会のあり方と結びつけて捉えられているからである。

この点は、高橋が鋭い眼差しで社会をみており、市場主義が行き過ぎた社会をより人間的なものに引き戻す必要性を強く訴えていることにも現れている。すなわち高橋は、現代社会には、唯物主義（目に見えるものしか信じない）、刹那主義（今さえよければそれでよい）、利己主義（自分がよければそれでよい）という三つの生き方が知らず知らずのうちに浸透していることを「時代の三毒」と呼ぶとともに、それが私たちの心と現実を歪めている（高橋 2014：80-84）と憂慮している。そして、これら3つの主義に真っ向から抗い、闘ってゆくのが魂主義（実践哲学）である（同：85-87）と位置づけている。このような社会観と政策論は、まさに社会科学の先端的研究者が主張していることと軌を一にするものである²⁰。

以上みたとおり、この実践哲学は5つの特徴を持つ。ところで、高橋による一連の書籍は、自己啓発のための書籍であると理解することもできる。このため、そうした性格を持つ国内外の類似書籍を比較検討してみると、この実践哲学は上記の特徴をも

るという新しい体制へ一挙に切り替えられている（『G.』2020年4月号79-81ページ、5月号46-51ページ）。

²⁰ 現在の日本社会では「今だけ、カネだけ、自分だけ」という風潮（三だけ主義）が支配しており、それが政府による公共政策を歪めているとして、その是正を強く求める良心的な意見（鈴木 2013：7；2016：152）がある。この「三だけ主義」はまさに「時代の三毒」という現状認識に完全に一致している。

つのできわめてユニークなものとして評価できる。そうした比較分析的な観点からの評価は、前述した別稿（岡部 2020a）を参照されたい。

2. 研究者による評価と予測

以上で概観した実践哲学は、どのようにして形成され、そして従来どのように評価されていたのだろうか。ここでは、社会科学の研究者（宗教社会学者、宗教学者、宗教人類学者）によって書かれた4つの文献（沼田 1995、島田 2007、渡邊 2011、松岡 2018）をもとにそれを辿ることとしたい。

(1) 沼田（1995）の研究：GLAの網羅的な分析と評価

この実践哲学を最も包括的に論じた文献は、筆者の知見と文献検索による限り、宗教社会学者である沼田健哉の著作『宗教と科学のネオパラダイム—新新宗教を中心として』（1995年刊行）に収録された長編論文「GLAの研究」（全67ページ）である。本書は、日本における7つの「新新宗教」²¹を具体的に取り上げて分析したものであり、その一つとして実践哲学ならびにその推進母体であるGLA²²が詳細に取り上げられている。そこでは、[GLAの創始者および継承者である]高橋信次および高橋佳子のライフヒストリー、GLAの教義、GLAの会員と組織、GLAにおける研修と学びの場、などの見出しの下に詳細が記述され、最後に「むすびに代えて」でそれらが要約されている。

この書籍（論文）は今から25年前に出版されたものであるが、実践哲学につき、上述した内容のエッセンス、そしてその将来を予測する洞察がうかがわれるので、以下その主要点をみることにしよう。

教団の創設

GLAは、仏教の基本思想である「中道」²³という心の物差しを重視した高橋信次に

²¹ 明治・大正期以降に台頭した各種宗教が一般に「新宗教」と称されるのに対して、1970年代から80年代以降に発展成長をとげた新宗教教団が通常「新新宗教」と呼ばれている（沼田 1995:36,41）。

²² God Light Associationの頭文字をとった組織名を持つ宗教法人。現在、高橋佳子とその主催者となっている。会員数5万8408人（2019年4月1日現在。物故会員1万343人を含む）（GLAホームページ <http://www.gla.or.jp/>による）。

²³ 快樂主義と禁欲主義の中間に位置する生き方。詳細は岡部（2017:227）を参照。

よって創設され（沼田 1995：117）、高橋佳子によって継承された。佳子は、人間一人ひとりには真の個性を持ち、天職と使命を持って生まれてきた「魂の存在」であると認識するようになった（同：122）。そして人生とは、魂を成熟させる機会であるとみる一方、今すべての人が宇宙・自然の語る声なき声、天来の響き（サイレント・コーリング）を聴き、その呼びかけに応えるべき時代が来ていると考えるに至った（同：122）。その後、この線に沿って実践哲学が発展することとなった。

教義

GLA の教義は「中道を根本として（中略）己の魂を修行すべし」（同：139）とする発想が基本にある。この点、既成仏教教団の読経は意味がわかりにくいのに対して、信次のものは「万人に理解できるように説かれている」（同：142）うえ、「さらに、佳子によってもかなりオリジナルな面をも内包しつつ展開されている」（同：142）点に特徴があると評価されている。

それらを整理すると（1）永遠不変の神理に還れ（GLA の原点）、（2）大宇宙は神の体であり、循環の法則によって貫かれている（宇宙論）、（3）人間は目的と使命を抱く永遠なる魂である（人間論）、（4）人生に無意味なものはない（現象論）、（5）自己の探求を通して人生の目的を果たす（実践論）、などが教義の体系を構成するとしている（沼田 1995：143-149）。

そして沼田（1995）は、それぞれにつき次のように敷衍している。まず上記（1）は「人間の本質は、智慧抱く意思のエネルギーであり、永遠の生命である魂としての存在である」（同：143）という理解を述べている。そして「今こそ、イエスの心の中心にあった愛、釈尊の心の中心にあった慈悲に還るべき」（同：143）というのが教団の主張であり「普遍的な神理の追求による人間復興の願いが [GLA の] 原点である」（同：143）と紹介している。

上記（2）は「神とは宇宙の意思ともいふべきもの（中略）であり、沈黙し続ける存在であると同時に語りかけ、働きかけて下さる存在」（同：144）と位置づけるとともに「本来、人間は神の子である」（同：144）とするのが GLA の考え方であると指摘している。

上記（3）は「人間は、永遠なる魂として、過去・現在・未来の三世にわたって転生輪廻という循環を続けている」（同：144）とする教義を語っている。そして

「人間の目的とは、1つには自ら自身の魂の成長と深化であり、1つには、この地上に調和された世界・仏国土・ユートピアを造ることである」（同：145）としている²⁴。

上記（4）は「痛みは呼びかけであり、人間を成長させ、魂を深化させる鍵である」（同：147）という認識を示している。最近ではこれが短縮化され「試練は呼びかけ」という生き方のモットーとして表現され²⁵、GLAの自己鍛錬において広く活用されている。ちなみに、試練に際しては、チャージ（Charge）=魂の願いを思い出す、チェンジ（Change）=私が変わります、チャレンジ（Challenge）=新しい人間関係・新しい現実をつくる、で対応すべきことが重視されている（高橋 2009：9章～11章）。

上記（5）は「自らを知り、自らを変えてゆくことこそ、真の人生の目覚めに向かう原点である」（沼田 1995：149）という考え方がGLAの基本であると紹介している。

以上のような教義を紹介したあと、これらにつき沼田（1995）は次のように評価している。「信次によって形成された教義は仏教の比重が高いが（中略）佳子によって展開された教義は、キリスト教の比重も高くなり、かつソクラテスをはじめとする哲学者や偉人の教えや生涯に関する逸話が多く内包されている」（同：155）。

「佳子の『サイレント・コーリング』²⁶や『祈りのみち』²⁷で展開されている内容をみると、キリスト教と仏教の高レベルにおける統合がなされており、とくに『サイレント・コーリング』は、[宗教学者] 島菌進²⁸のいう神霊性運動²⁹と親和性を有する著書といえよう」（同：151-152）としてその先進性を評価している。そしてこれらのことは「GLAがある種の宇宙的世界観をも内包した教団であることを示して

²⁴ これは、別稿（岡部 2020a）で述べたように、この実践哲学は単に個人の幸せを追求するだけでなく、より良い社会の構築という目標（社会的含意）も併せ持つことが一つの特徴であることを表している。

²⁵ 例えば、高橋は『Calling—試練は呼びかける』（2009年）において次のように述べている。「『試練からのよびかけ』を聴き、そのメッセージに応じて生きてゆくとき、私たちは、事態のマイナスをゼロに戻し、さらにプラスに導くことができる。いいえ、それだけではなく、試練を通じて、心の奥に刻まれている魂の願いを見出し、人生の仕事とも言うべき大きな目標を果たすことができるのです」（同書：6）。

²⁶ 高橋（1991）。

²⁷ 高橋（1994）。その改訂増補版は高橋（2006）。

²⁸ 宗教学者。東京大学名誉教授、上智大学神学部特任教授。

²⁹ 以下の第4節で述べるスピリチュアリティに関連する。

いる」(同:155)と評価している。

また、その後「ホリスティック・ヘルス³⁰、エコロジー³¹の要素を内包するようになり、さらに(中略)永遠の生命としての人間学に基づく医療研究会や、経営研修機構が、GLAとは別組織の任意団体としてすでに発足し活動している」(同:175)として、実践哲学の適用範囲と活動領域の広がりがかかなり詳しく記述されている。

会員と組織

GLAの会員数は、1976年末に8,761名、1994年3月末には16,639名であった(沼田1995:156-157)³²。1994年3月末の構成は、30歳未満の青年層10%、壮年層67%、60歳以上の豊心層23%であった(同:157)。

「代表者が若いわりには青年層の占める比率が低いのがひとつの特徴であり、今後の課題であろう。その要因の一つとしては、GLAの教義や学びの内容が、民衆宗教としては高度すぎるため、人生体験の浅い者には本質的な部分に至るまでの理解が困難であることもあげられると思われる」(同:157)という観察が示されている。

また、教団の組織は「柔軟であり、硬直したものではない」(同:158)と評価、「会員が主体的・自発的に研鑽や伝導ができることをめざして様々に変化を遂げてきている。組織に人がしばられず、しかも組織としての有機的な結びつきも確保されるような形態が模索されてきた」(同:158)と評価されている³³。例えば、研鑽システムの一つとして「プロジェクト活動」³⁴がある。これは、老若男女や社会的立場や役割等に関係なく、一人の同等の人間として現実を見る目を養い、神理で捉え、発想し、判断することを学ぶグループ研鑽の場であるが、GLAプロジェクトの方針は「全員メ

³⁰ 人間の身体的、精神的、霊的側面は相互に関連しているという観点に立った治療法(https://psychology.wikia.org/wiki/Holistic_health)。

³¹ 人間も生態系の一員であるとの視点に立ち、人間生活と自然との調和・共存をめざそうとする考え方(<https://ja.wikipedia.org/wiki/エコロジー>)。

³² 現在の会員数は約5万人(前出脚注22を参照)。

³³ 組織構造は、階層の上下関係が明確なツリー構造(tree structure)とは対照的な「セミ・ラティス(semilattice)(半束)構造」(網状交差構造)になっていると評価されている(沼田1995:158)。セミ・ラティス構造とは、例えば人体のようにそれぞれの器官が主体的な機能を持ちながら、しかも相互補完的に関わりあうことができる構造を指す(同:158)。実体的にいえば「教団スタッフと一般会員のいずれにとっても個人主義を生かしやすく(中略)自己組織性の原理が生かされている教団」(同:174)という評価ができる。

³⁴ 現在は、オンライン接続により国内と海外で同時実施されるようになったので「グローバル・ジェネシスプロジェクト研鑽」と名称が変更されている(GLA総合本部出版局『G.』2020年2月号、62-69ページ)。

ンバー、全員リーダー」(同：159) というのが特徴になっていると紹介している。

「これらの点からみても、GLAは[宗教学者] 島菌進のいう新霊性運動のネットワークという側面をも有しているという見方も可能である」(同：159) というのが沼田の評価である。つまり伝統的な宗教においては、その教義や組織階層の面で縛られる度合いが大きい。しかし、GLAの教義は独善的というよりスピリチュアルな性格が強く、また組織としても会員の研鑽過程には柔軟さがあって束縛する側面が少ない。このためこの実践哲学は、これらの面で伝統的な宗教とはかなり性格を異にしており、現代人に好まれる条件を備えている、とみられるというのが沼田(1995)の理解である。

研修と学びの場

会員が学び研修する場も多様なものが用意されている(沼田 1995：159-169)。まず、前述した高橋による講演会やセミナーがあるほか、全国レベル、地方レベルなど大小様々な規模のものがあることが紹介されている。そのうち、ユニークなものとして、研鑽(学び)と奉仕(実践)が一つになった上記の[グローバル・ジェネシス]プロジェクト活動があると指摘、これは「GLA行事等、実際の仕事を任される短期的グループ学修であり、立場、役割を様々に体験しながら、神理に基づきものごとに対する洞察力を深め、人間の本来の関わり方の訓練をする」(沼田 1995：162)という研鑽の仕組みであると紹介している³⁵。

また研修は、年齢層ごとにも行われている点にも着目している。それらは、豊心大学(60歳以上向け³⁶)、こころの看護学校(壮年層の女性向け)³⁷、青年塾(高校生以上、30歳未満³⁸)、かけ橋セミナー(親と子が同時に参加)などの名称で行われている(同：163-169)として、それぞれが詳細に紹介されている。

そのうち、豊心大学については「精神の姿勢として、人間に対する尊敬、生命に対する愛、謙虚さ、内的平和、慈愛心を掲げ(中略)一人ひとりが過去幾多の困難や苦

³⁵ その最近の内容についての詳細は、前出脚注34で言及した資料を参照。

³⁶ 現在は65歳以上向けに変更(GLA総合本部出版局『G.』2020年4月号、79-80ページ)。なお、豊心大学は、法人ではなくセミナーの名称である。

³⁷ 現在は「フロンティアカレッジ・こころの看護学校合同セミナー」(30~64歳の男女共通のセミナー)として実施(カレッジは法人ではなくセミナーの名称である)。

³⁸ 現在は「中学生以上、35歳以下」に変更(GLA総合本部出版局『G.』2020年4月号、79-80ページ)。

悩を通して経験してきた人間としての痛みや喜びを、魂の豊かな成長の糧とできるような学びを深める」(同：166) ための場であると紹介している。そして「これは、ユング心理学³⁹の成果などをふまえつつ、高齢化社会もしくは長寿社会の到来を視野にいれて形成されたものといえよう」(同：166) として、GLA の先見性を評価している。

また、かけ橋セミナーについては「子供に対する定見(魂存在として子供をみる)をもち、世代を越えて人間、人生について学ぶ場である」(同：168) と紹介し、子供も親も同時に「人間として成長していくことを目指しているものといえよう」(同：169) と評価している。

以上のような研修と学びの場については「画一化された強制というものが存在せず、会員の自発的意思を尊重するのが GLA の大きな特徴の一つとしてあげられる」(同：165) と指摘、研鑽は自由に選択して行うシステムになっている点に着目している⁴⁰。そして「GLA の研修は、最先端の組織論をもとに、現代社会が抱えている諸問題に対し、未来志向的に解決への道を示唆せんとしているかに見受けられる」(同：169) と結んでいる⁴¹。

評価と予測

沼田(1995)は、実践哲学とそれを推進する組織である GLA を以上のように紹介し、「結びに代えて」として次のような総括と評価、そして予測を行っている。

まず「GLA は、明確な儀礼を定めない教団であり、崇拜対象も存在せず、経を音読することもせず、偶像崇拜もしない⁴²。そして、人間の平等性を説き、自己の心を磨き調和すると共に、この世に仏国土・ユートピアを建設することをその主たる目標と

³⁹ ユングはスイスの心理学者(1875-1961)。分析心理学を創始し、人間主義的な思想により幅広い学問分野に影響を与えた。

⁴⁰ この点は、4章でのべるとおり、GLA は組織にしばられる伝統的な宗教の性格が希薄であること(そうした制約が強い伝統的な宗教よりもスピリチュアリティを好む現代人の傾向にマッチしていること)を表している。

⁴¹ 「なお、セミナーの際の[高橋]佳子の講演は現在でも二、三時間にもおよぶ」(同：164) と指摘、「これは一流といわれる国立大学の授業時間でさえ110分であることを参照すると、やはり長時間すぎるといえよう。休憩時間をあいだにとれば、講演がより効果的なものになると思われる」と評している。

⁴² 「GLA では、神仏を特定の像に表現して本尊とし、崇拜や祈りの対象にすることはしていません」(GLA 2014:35)、「『祈り』は、神に懇願することでも、神を動かそうとすることでもありません(中略)。『祈る』ことは、神への働きかけ以上に、自らの心への働きかけなのです」(高橋 2007:30)。

する」（沼田 1995：169-170）と総括している。

そして「〔高橋〕佳子の講演もわかりやすく説得力のあるものになってきている（中略）ことから、その力量は、これから本格的に発揮されていくといえよう」（同：172）と予測している。現に「最近の講演をみると（中略）ふさわしい宗教的指導者となりつつあるように見受けられる。すでに現在〔1995年〕においても、小規模の教団でありながら政界・財界・マスコミ界のトップレベルの者が相当数シンパとなり、この事実も〔高橋〕信次と佳子の力量が一流と言われる人々によって評価されている例証としてあげられる」（同：172）として、この実践哲学の指導者および組織の将来性を見通している。

また「GLAの教団スタッフらと接しての〔著者沼田が受けた〕印象は、常に人間性の向上を旨とする人びとの集団であるということにつきる。従って他の教団に対しても、そのスキャンダルを暴くというようなことは少ない。敵対する人物や教団に対しても、それらの人びとがよりまっとうな道へ向かうように示唆するというスタンスをとっている」（同：172）と述べ、教団には一途さと誠実さがみられると評価している⁴³。

さらに「信次や佳子の著書の読者はGLAの会員数と比較にならないほど多数存在（中略）〔するので〕GLA教団は、ある意味においては、信次と佳子によって生じた新霊性運動の中核部分を形成しているという見方も可能である。従って、この両者の社会的影響力は、会員数をもってしては推し量ることができないほど大きいともいえよう」（同：175）と指摘している。

そして「現在〔1995年〕のGLAの教義、活動形態をみると、現代的というよりは21世紀を見据えた未来志向的ともいえる部分を含んでおり、今後の発展が予測される」（同：177）、「佳子も信次と同様、極めて注目すべき宗教者であり、今後の佳子とGLAの動向は見守っていくに値するといえよう」（同：178）と結んでいる。

（2）島田（2007）の研究：現代性をもつ教団としてGLAに注目

以上みた沼田（1995）ほど網羅的ないし長編の研究ではないが、この実践哲学を取

⁴³ ここで引用した箇所あと、著者（沼田）は続けて次のように記述している。「従って、筆者のような信仰心の欠如した人間は学ぶべき点が多い教団であり、かえって自己の未熟さを思い知らされてきたというのが実情である」（沼田 1995：172）。この書籍（書名「宗教と科学のネオパラダイム」と題する7教団についての分析）は、社会学者によるものであるにもかかわらずこのような記述が本文に含まれているのは、異例というべきであるとともに、これは著者の本心を吐露したものと見えよう。

り上げた、より新しい研究結果を以下三つ簡単にみておこう。

まず、島田裕巳『日本の10大新宗教』（2007年）をみよう。これは、上述した沼田（1995）より12年後に刊行された新書版の書物（全215ページ）であり、表題が示すように日本の大きな「新宗教」10教団の現況を宗教学者である著者（島田）が概説したものである。

その冒頭において、まず「新宗教」という用語法について注意が喚起されている。「[日常的に使われる]新興宗教ということばには、差別的で否定的なイメージがつきまとうことから、宗教学や宗教社会学の学界において、新興宗教ではなく、新宗教という中立的な名称を積極的に使おうという動きが生まれ、研究者の間で一般化」（島田2007：19）しているという理解が提示される⁴⁴。このため本書では、新興宗教という表現は用いず新宗教と表現されている。そして「本書では、教団の規模、現在あるいは過去における教団の社会的な影響力、さらには、時代性を考慮して、10の教団を選んだ」（同：27）⁴⁵と同書の執筆方針が説明されている。

そして本書では、GLAは最後（10番目）に取り上げられている。その理由として（1）「GLAの信者数は最も少ない部類に属する（2006年の時点では公称26,000人⁴⁶）が、教祖（高橋信次）の影響は教団の外にも及んでいること」（同：192-193）、（2）「高橋[信次]が生涯にわたって専門の宗教家にならなかったこと（高橋は生前、町工場の経営者だった）」（同：194）、（3）「教団の名称も現代的であるうえGLAの宗教としての中身も相当に現代的であること」（同：194）を挙げている。つまり、著者が選定基準とした3条件（教団の規模、社会的影響力、時代性）のうち、規模は満たさないものの、社会的影響力、時代性という二つの基準（とりわけ時代性）に照らして同書がGLAを採り上げたとしている。

同書におけるGLAないし実践哲学の紹介は、書物の性格および紙幅の制約を反映し、自ずと概略にとどまっている。まず「[高橋]佳子は『TL(トータルライフ)』人間学を提唱、その領域は経営、医療、教育に広がっている」（同：200-201）ことに着目している。そして、高橋およびGLAの「具体的な活動としては、講演会の開催や、地域における小規模な研鑽の実践、会員の指導を行っている」（同：201）ことを紹介

⁴⁴ ここで定義された「新宗教」は、前出の沼田（1995）のいう「新宗教」とは異なり沼田が「新新宗教」と規定したものに該当する。

⁴⁵ ただし、反社会的な性格、一般的価値観と対立するような教えを含む教団は除外（島田：27）。

⁴⁶ 最近時点での会員数は、前掲脚注22を参照。

している。そのうち「講演会は集団的なカウンセリングに近いもので、佳子は、一人の参加者の人生の歩みを分析し、その方向性に対して示唆を与えていく」（同：201）ものだと特徴づけている。

そして「こうした GLA の講演会は、洗練されていて、宗教というイメージからはむしろ遠い。（中略）佳子にしても、ビシッとスーツを着こなし、新宗教の教祖というよりも、有能な女性経営者という雰囲気に近い」（同：201）。「そもそも GLA では、神や仏といった存在は表にでてこないし、そのスローガンは、『私が変わる。世界が変わる』で、精神世界の運動全般に通じている。佳子は、死を間近にした会員やその家族のケアなども行っており、その点でも、現代において宗教に求められる役割を忠実に果たしているとも言える」（同：201）としている。

こうした説明のあと「GLA は、新宗教のなかでもっとも現代的な形態をとっていると言える。高橋 [信次] から娘の佳子に継承されることで、土俗的、土着的な要素が払拭され、宗教団体というよりも、大規模な精神世界の運動にその姿を変えてきた。宗教運動として捉えるよりも、スピリチュアルな運動のなかに含めて考えた方が、理解しやすいかもしれない」（同：202）と評価している。そして「現在の GLA の活動は、ひどくまっとうであり、問題にすべきところもほとんどない。これからの新宗教が進んでいくべき道を示しているとも言える」（同：202）と結論している（これが書物全体を締めくくる表現になっている）。

以上のように島田（2007）は、この実践哲学の主宰者、その推進組織 GLA、その教義ならびに研鑽方法などを述べ、この実践哲学には現代性と可能性が大きいという見方を示している。とりわけ、宗教というよりもスピリチュアルという性格づけも可能であるとしている点に島田の洞察があるのではなかろうか⁴⁷。

(3) 渡邊（2011）の研究：実践哲学を心理学的に位置づけ

その後になされた GLA を対象とする研究として、宗教学者・渡邊典子による研究『心理学主義化』する新新宗教の教説－GLA を事例に－（2011 年）がある。これは、GLA が主唱する実践哲学を心理学の観点から位置づける試みであり、その自己管理方

⁴⁷ ちなみに「宗教的ではないがスピリチュアル」（Spiritual but not religious: SBNR）という思想は、日本だけでなくアメリカなどでも一つの重要な潮流になっている。この点については、別稿（岡部 2020b）を参照。

式は現代社会の希求に合致している、という趣旨の論文である。この論文にはやや難解な表現や箇所が含まれるが、以下でそのエッセンスを出来るだけ忠実にたどってみよう。

渡邊（2011）は、近年盛んになった自己分析において「心理学化」（社会の諸現象や心理が心理学の言葉で記述されてゆく傾向）が目立つという認識をまず提示する（渡邊 2011：44）。つまり「21 世紀の日本は『心理主義化する社会』であり、カウンセリング/セラピー文化が流行し（中略）[人々はこれらを] 科学的・医学的な『技法』と考える」（同：44）ようになったとみている。

こうした状況下「日本の新新宗教ブームの先駆的な役割を果たしたのは GLA（God Light Association⁴⁸、1969 年設立）である」（同：44）と指摘、GLA における自己分析のあり方に議論を進める。そして、教団の活動の一つの中心である「高橋佳子講演会」（以下、講演会）に焦点を合わせ、その運営方法ならびに意義を心理学的に分析している。

まず講演会は、高橋が教えを会員に講義をし「神理（教え）実践報告」が行われる場であると規定している（同：44）。そして「GLA の『神理実践』とは『行』の実践である一種のカウンセリング的ふりかえり技法により、会員が過去を再解釈し新しい物語から、自己実現をすることを指す」（同：45）ことだと渡邊は観察する。つまり「『神理実践』とは高橋が会員にカウンセリング技法で『癒やす』ことと解釈できるので、それは「『心の管理をする技』でありここでは『心の技法』と呼ぶことにする」（同：45）と位置づけている。

そして「GLA のカウンセリング的ふりかえり技法の『行』としては『止観行』と『ウイズダム』の2種類がある」と指摘、前者は「気づかなかった瞬時の心をモニタリングするもの」であり、後者は「問題解決と創造のメソッドであり、内なる心を転換させるもの」（同：48）と手段に関する具体的な説明をしている。

渡邊はこうした観点をさらに敷衍し、GLA では「スピリチュアリズムの影響もあり（中略）[このような発想と実践が] 一種の自己責任の教義となっており、『心身の管理』技法の禅定や瞑想やカウンセリング的ふりかえり技法も『行』となる」（同：47）と指摘する。そして「[高橋が会員を相手として行う] 舞台上での [実践] 報告に

⁴⁸ 「神の光がこの地上に顕現することを願う集い」の頭文字（GLA 2016:18）。

は、カウンセリングの要素もあり、これはスピリチュアル・カウンセリングの一種と考えられる」（同：48）と判断している。つまり「GLA の実践 [報告]とは、ロジャーズの自己理論⁴⁹のように、会員が主体的に自己を語り、自己の洞察を深め、問題のありかを発見し、自ら解決していく」（同：51）ものであり、「会員が自身で自己の『使命』を探し、自己の望む自己実現という『成長』を目指す」（同：51）点にエッセンスがあると指摘している。つまり、この点においてマズローの人間成長論⁵⁰の枠組みに沿うものであることを渡邊は示唆している。

以上のことから、GLA のカウンセリング的ふりかえり技法は「意識的に自己をモニタリング」して「自己実現」を目指すものであると要約し、それは「一種の自己責任論」に立つものである、という判断を下している（同：54）。

一方、伝統的秩序から脱却した現代人は、自由に自己啓発できる状況に置かれているため「自己の選択した『心身の管理』の教説や技法を携えて『自己実現、自己成長のプロジェクト』の実現に向かう様相が窺える」（同：54）と指摘している。そして、このような時代には「人々は『心理主義化する教説』を希求する」ので、GLA の教説はまさに時代が求める人間の生き方とその実践方法として「親和的なもの」（同：54）である、というのが渡邊の結論である。

（4）松岡（2018）の研究：聖地の考察から実践哲学を特徴づけ

宗教人類学者・松岡秀明は、最近「模索する新新宗教—聖地と墓地をめぐって」（2018）と題する研究を発表している。これは、GLA の聖地（と墓地）というユニークな観点からその特徴を描き出そうとしたものである。その中心的な議論（聖地関連）は3章（3）で扱うので、ここでは松岡（2018）がGLA をどのような性格を持つ教団として位置づけていたかを簡単に紹介する。

松岡（2018）では、まず（1）序文、（2）GLA の教義—輪廻転生と心理主義、（3）GLA の実践—心のコントロール、と題した3つの節でGLA とその教義を概観している。この部分は上記の3つの研究と格別の違いはみられない。続く（4）～（9）において

⁴⁹ 生き方のカウンセリング（心理療法）に関してロジャーズによって説かれ、20世紀後半に有力になった理論。人間は自己を向上させる行動動機を持つとされ、臨床に際しては尊重、受容、共感などの概念が重視される。

⁵⁰ アメリカの心理学者マズローが提唱した人間観。人間の欲求には5段階あり、その最終段階として「自己実現の欲求」があるとする考え方（Wikipedia “Self-actualization”；岡部 2017：233）。

GLA の聖地「八が岳いのちの里」が多面的に考察されている。そしてそれを踏まえた著者なりの見解が (8) ～ (9) において示されている。

その結論は「GLA の実践においては現世における自己実現が強調されており、死をもって自分の物語を完結させる個人主義が際立っている」(同：120-121) とする点にある。そして「現在の GLA では、脱現世志向(現世よりもあの世を重視する傾向)や呪術的な神秘主義は後退している」(同：121) と指摘、「このような変化と並行して心理主義的な傾向が強くなり、心をコントロールすることを『研鑽』として重視する教団となっている」(同：121-122) ことに特徴があると性格づけている。これらの点は、上述した渡邊(2011)の認識を継承しているといえよう。そして GLA は「[宗教学者] 島菌の分類⁵¹に従えば個人参加型になったと考えることができる。この変化は宗教の個人主義化が進みつつある状況に対応していると思われる」(同：122) と述べ、GLA の教義とそこでの研鑽の動向が時代の流れに調和した教団であるという基本認識を提示している。

3. 最近の多面的な展開と高度化

以上、GLA について代表的な研究事例を 4 件概観した。そのうち、最も早い時期になされた網羅的研究である沼田(1995)では、前述したとおりのような判断がなされた。すなわち (1) 小規模の教団でありながらすでに政界・財界・マスコミ界のトップレベルの者が相当数シンパとなっている、(2) 高橋の著書の読者は GLA の会員数と比較にならないほど多数存在する、(3) その教義、活動形態は現代的というよりは 21 世紀を見据えた未来志向的ともいえる部分を含んでいる、などが指摘され、そして今後の発展が予測されるとした。また島田(2007)は、GLA は宗教団体というよりも大規模な精神世界の運動にその姿を変えてきたと評価し、現在の活動はこれからの新宗教が進んでいくべき道を示している、という判断を示した。

本節では、そうした予想がなされた後、最近 15～25 年における GLA をみた場合、それがどのような形をとって現実化しているか(あるいはそうでないのか)を具体的にみることにしたい。

⁵¹ 島菌(2001：29)は、日本の「新新宗教」につきその教団の緊密さの度合いを基準として、(1) 教団内の人間関係が閉鎖的な「隔離型」、(2) 信者を束縛せず個々人の判断で関わればよい「個人参加型」、(3) それらの「中間型」の 3 つに分類した。

(1) 実践哲学としての体系化・科学化の進展

まずこの実践哲学は、人間論としても実践論としてもさらに体系化されるとともに、現代科学の成果が積極的に取り入れられていること、そして説得力が増していることを指摘できよう。

体系化

それらは多岐に亘るが⁵²、ここではその一部を例示的に言及するにとどめる。まず人間と人生について理解する場合、「人天経綸図」という概念が導入されている（高橋 2017a : 56）。人天の経綸とは、人と天によって織りなされる約束を指し、人生のありよう（人間が進化してゆく段階）を示すものとされる。つまり、人間は当初「宿命の洞窟」（三つの「ち」⁵³、initial self）から人生を始めざるを得ないが、自己啓発によって行動パターン（人格）をかえれば「運命の逆転」をすることができ（next self）、さらにその深化によって「使命の地平」に至ることができる（real self）、という道筋で理解できることが提示されている。

また、生き方の具体的な方法として、最近「カオス発想術」が導入されている。これは、目の前の現実をカオス（光と闇の両方を含んだ結果未詳の状態）と捉え、自分の心を整えてそれに対応することによってその中から光の要素を取り出して結晶化させる、という方法である（高橋 2018a : 174-176）。さらに、市場主義が行き過ぎた現代社会に対して「時代の三毒」という視点を導入し、それをより人間的な社会に引き戻すうえでこの実践哲学は貢献する余地があることも主張している（本稿 10 ページ第 3 段落および脚注 20 を参照）。

科学化

一方、この実践哲学は、諸科学における研究成果を取り込んで、体系をより緻密かつ頑健なものにしてきていることも注目される。すでに渡邊（2011）の研究を紹介し

⁵² この実践哲学におけるキーワードは、月刊誌『G.』において 2017 年 4 月号以降、毎月「魂の学」辞典として簡潔かつ原典（高橋の著書等）に基づく説明がなされている。本稿執筆時点で既に 37 項目に及ぶ（なお人天経綸図は 2018 年 4 月号、66-67 ページに掲載）。

⁵³ 三つの「ち」のうち、「血」とは、両親や家族から流れ込んでくる考え方や生き方・価値観。「地」とは、地域や業界から流れ込んでくる考え方や生き方・慣習や前提。「知」とは、時代から流れ込んでくる考え方や生き方、知識や常識、価値観（高橋 2019a : 42）。

つつ第2節で論じたとおり、現代社会は心理主義（あるいは心理学主義）の傾向にあり、GLAの研鑽はまずそれを体現したものとなっている。

事実、高橋の最近6年間における著作をみると、科学の活用が一段と増えている。例えば、相手に強く期待すると相手はそれを実現する傾向がみられるとするピグマリオン効果（高橋2014：36-37）、集団で共同作業を行う時には集団の規模が大きくなればなるほど一人当たり生産性が低下するという社会心理学のリンゲルマン効果（同2014：205-206）、老婆か若い婦人かに関する心理学の多義図形（同2016：160-164）、自己を自分からみた場合と他人からみた場合を対比して分析する心理学モデルのジョハリの窓（同2019a：32-34）など、心理学に関連する各種命題が頻繁に登場する。

また、経営学で良く知られたPDCAサイクルと実践哲学の対比（同2017a：109-113）、組織論における決定木（decision tree）を応用した「人生の樹形図」（同2017a：130-133）、行動経済学をもとに人々を望ましい選択へ導くナッジという手法（同2019a：38）など、社会科学の知見を踏まえた記述も多い。さらに、この世のものは放置すれば全て崩壊に向かうことと本質的に同一現象であることを示唆する熱力学のエントロピー増大の法則（同2019a：187-188）といった物理学の法則、あるいは宇宙論学者ロバート・ディッケの人間原理宇宙論の紹介と応用（同2017a：230-231）、宇宙論におけるユニバースとマルチバース（同2018a：111-112）、心と身体の結びつきに関する心身相関など心身医学の応用（同2019a：114-115）など、現代の学問的知見を十分に活用した論理、説明、あるいは比喩が至るところにみられる。

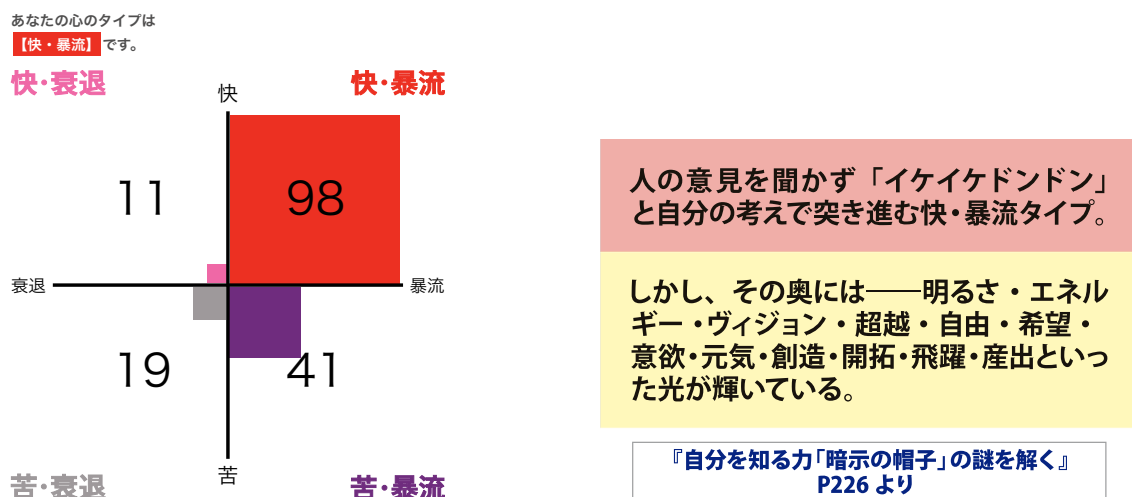
そして、最も新しい著書『自分を知る力』においては、高橋の人間論の基礎となっている「煩惱地図」（人間の4タイプ）につき、それぞれの回路（受信と発信ないし行動）を結びつける新しい統計的研究とその応用を提示した（高橋2019a：3章「受発色のタイプを診断する」）。そしてそれらの間の関連性の有無を明らかにする因子分析を行ったところ、それには頑健性があることを示すデータも巻末で公表している（高橋2019a：292-293）。そして、こうした自己の性格診断は、この書籍の読者はもとより、誰でもインターネット上で無料でできる仕組みが提供されることとなった（次節で述べる）。これは、この実践哲学にさらに確固とした基礎を与えるとともに、その活用において画期的な出来事とあってよいのではなかろうか。

オンラインによる自己の性格診断：活用例

上述したインターネット上での自己の性格診断を具体的にみよう。従来は高橋の書籍の中、あるいは講演会の会場に限ってそれが可能であったが、2019年秋以降はオンライン上で誰でも（無料で）そして簡便に利用できるシステムとして提供されている。その利用方法は書籍（高橋 2019a : 81-95）に記載されているが、それを読まなくてもインターネット上で所定の画面⁵⁴にアクセスし、そこに出てくる 36 項目の質問に逐次回答することによって、誰でも簡単にそして直ちに診断結果を得ることができる。

参考までに、筆者がこの「自己診断チャート」に取り組んだ結果を図表 3（3 枚）として掲げておこう（これは第三者に見せるべき性質のものではないが、このシステムの仕組みを実感していただく目的でここに掲載する）。

図表 3-1 自己診断結果の事例（1）



© Keiko Takahashi

(注) 本文を参照。なお、図表 3-1 から図表 3-3 を本稿に掲載することについては、書籍『自分を知る力』（高橋 2019a）の著者ならびに三宝出版株式会社の承諾を得ている。

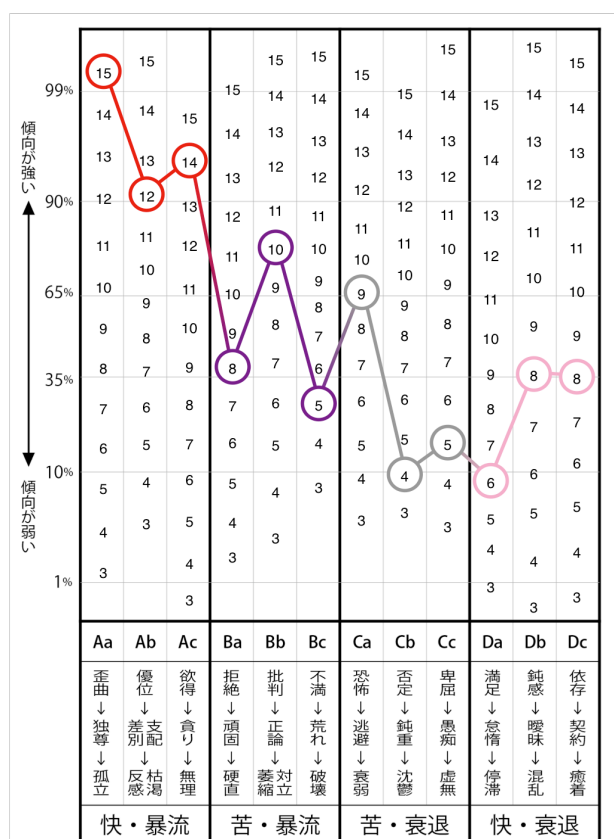
図表 3-1 は、被験者の性格がどのようなものであるか（4つの人格パターンの要素それぞれをどの程度持つか）、そしてその特徴ならびにそれが秘める可能性を示している。図表 3-2 は、4つの人格タイプそれぞれが持つ感覚・行動の回路（各 3 種

⁵⁴ <https://bk.jsindan.net>

類) がどの程度のものであるか (いわば性格を要因分解した結果) ⁵⁵である。そして
図表 3-3 は、性格のなかでとりわけ顕著な傾向は何か、そしてそれを矯正するため
 にはどのような鍛錬 (心の育成) をすればよいか、が示されている。筆者は、図表 3
 -1 と図表 3-2 を見て、驚かされるとともにこれは腑に落ちる診断だと感じた。また
 図表 3-3 が示す自己啓発の方向も納得した次第である。

図表 3-2 自己診断結果の事例 (2)

図表 3-3 自己診断結果の事例 (3)



あなたの特徴的な回路は
【歪曲-独尊-孤立】です。

偽我 (Initial Self)
歪曲→独尊→孤立

物事をねじ曲げて受けとめ (歪曲)、自分だけが正しく偉いという言動 (独尊) により、周囲の人たちの気持が冷め、離れてゆき孤立する

(※詳しくは→P242-243)

あなたの育むべき善我は
【正直-愚覚】です。

善我 (Next Self)
正直→愚覚

あるがままの現実を受けとめ (正直)、自分の足りなさ、愚かさを認める (愚覚)

(※詳しくは→P252-254)

© Keiko Takahashi

© Keiko Takahashi

(2) 高橋著作の継続的増大、研鑽体制の拡充

近年の第二の特徴は、高橋の著作が一段と増加し、そして多様化する一方、GAL 会員の研鑽体制が継続的に拡充されていることである。

⁵⁵ 4つの人格パターンおよび各人格の3つの回路については、統計分析 (因子分析) の結果、その妥当性が確認されている (高橋 2019 a : 292-293)。なお、一般の自己啓発書 (特にビジネス関係書) においては「快・暴流」が望ましいことを示唆するケースが多いが、それは必ずしも正しい方向ではない (高橋 2019a : 227)。なぜなら、それは強い負の副作用を持つ (同 229-231) うえ、持続可能性を欠くからである (同 261)。

高橋による著作の継続的増大、そして多様化

高橋は、年間100回をこえる講義や講演を行う（山田・井口 2018 : 209）ほか、実践哲学を伝える一般向けの書籍を精力的に執筆している。その刊行テンポは当初よりも加速し、最近約20年間は1年にほぼ1冊着実に刊行されるようになっている。

それらは、『新しいカー「私が変わります」宣言』（2001年）、『「私が変わります」宣言ー「変わる」ための24のアプローチ』（2002）、『人生で一番知りたかったことービッグクロスの時代へ』（2003）、『いま一番解決したいこと』（2004）、『あなたが生まれてきた理由』（2005）、『新 祈りのみちー至高の対話のために』（2006）、『12の菩提心ー魂が最高に輝く生き方』（2008）、『Callingー試練は呼びかける』（2009）、『魂の冒険ー答えはすべて自分の中にある』（2010）、『魂の発見ー時代の限界を突破する力』（2011a）、『1億総自己ベストの時代ー人生の仕事のを見つけ方』（2013b）、『魂主義という生き方ー5つの自分革命が仕事と人生を変える』（2014）、『未来は変えられる！ー試練に強くなる「カオス発想術」』（2015）、『運命の逆転ー奇跡は1つの選択から始まった』（2016）、『あなたがそこで生きる理由ー人生の使命のを見つけ方』（2017a）、『最高の人生のつくり方ーグレートカオスの秘密』（2018a）、『自分を知る力ー「暗示の帽子」の謎を解く』（2019a）などであり、驚異的といえよう（これらはいずれも一般書店ないしアマゾンで購入可能）。

このうち、2013年の著書の表題「1億総自己ベスト」という表現は、当該書籍が刊行されて約1年経過した後、ジャーナリズムなどで一般に広く使われるフレーズになった。また、これら書籍のうち、最近刊行分は順次英訳され、Takahashi (2011, 2014, 2015a, 2015b, 2017, 2018a, 2018b) などとして刊行されてきている。

また、高橋は詩人としての素質にも恵まれており、例えば『千年の風』（高橋 2000）のように詩によって洞察を伝える著作も従来からあった。こうした側面を捉え「高橋の最近の著書にみられる水晶のような透明感と、禅の高僧のような境地は（中略）今後多くの信奉者が生じる可能性を秘めているという見方もできる」（沼田 1995 : 177-178）として、別の側面から高橋の思想と資質を評価する向きもある。このような一面は、現に東日本大震災を機に刊行された『果てなき荒野を越えて』（高橋 2011b）をはじめ、『彼の地へー3.11からのメッセージ』（同 2012）、『希望の王国ー地図にない国を求めて』（同 2013a）など、写真入りの詩集として刊行されている。そして、これらの3冊は英語版（Takahashi 2015c, 2015d, 2015e）も出版されている。

さらに、人生で誰もが直面する具体的な課題を扱った『いざというときのベストチョイス—突然の病を迎え撃つために』（ベストチョイスシリーズ1；高橋 2017b）を2017年に発刊、その後『いざというときのベストチョイス—人生の卒業式を輝かせるために』（同 2018b）、『いざというときのベストチョイス—介護を通して自らと家族が輝く』（同 2019b）と続刊を出しており、人生の様々な局面に対して実践哲学を援用しつつ会員を支援している⁵⁶。

この間、実践哲学を演劇という形をとって伝える試みにも取り組んでいる。高橋が総合プロデュースしたこうした演劇として「ミサミスの太陽」、「玄説 小栗判官」、「フローレンス・ナイチンゲール - クリミア、もう1つの戦い」、「波濤を越えて—鑑真とその弟子たち」などがある⁵⁷。

研鑽体制の拡充

この実践哲学を研鑽するに際しては、高橋佳子講演会（年に数回開催）、通年の週次研鑽システム（グローバルジェネシス・プロジェクト研鑽）、年齢階層別セミナー、専門職向けの TL 人間学セミナーなど、従来から多様な場が提供されている。これらの場においては、高橋がそのために作成したそれぞれに相応しい各種取り組みワークシートが準備されている。参加者は高橋の講演（講義）を聴くとともに、それらのシートに向き合って自分の心を見つめ、カオス発想術により行動指針を導くという形で研鑽の場が進行する。

近年の大きな特徴は、インターネットや通信技術の発達により、高橋の講演（会場は横浜国立大ホールの場合が多い）は全国幾つかの都市に同時中継され、全国で約1万名が参加できるようになったことである（山田・井口 2018：210）。さらに、主要講演はビデオ収録され、それらが CD ないし DVD のかたちで頒布され⁵⁸ 随時容易に利用できるようになったことも、会員・非会員ともこの実践哲学に触れる機会を増やしている。

特に、上記の週次研鑽に際して、ごく最近新しい展開がみられた。その研鑽では、従来、GLA 本部から地方の拠点あてにインターネット配信され、会員はそこに集って

⁵⁶ <https://www.gla.or.jp/items/page/8/>

⁵⁷ <https://www.gla.or.jp/items/page/4/>

⁵⁸ <https://www.gla.or.jp/items/>

研鑽するというシステムが採られていた。しかし、2020年2月に新型コロナウイルス禍が国内で発生、このため感染リスク回避のため政府から集会の自粛要請が発出され、拠点に集合することができなくなった。GLA（高橋）は、この状況を「カオス発想術」で捉え、「闇を抑えて光を取り出す」対応を行った結果、ほとんどの研鑽を短期間のうちにオンライン・ライブ中継による実施に切り替えることとなった。その結果、政府による緊急事態宣言（2020年4月16日）が発令されるに先立ち、参加者は自宅に居ながらインターネット経由で新しい研鑽システムに参加できるようになった。これにより、例えば週次研鑽（グローバルジェネシス・プロジェクト研鑽）の参加者は、前年は約6,000人だったものが今年は約17,000人と大幅に増えた⁵⁹ほか、新設された週ごとの「一日一葉特別セミナー」は、開講初日の5月6日以降、国内および海外の約15,000人がインターネットを介して参加するようになっている⁶⁰。

（3）人生の各ステージに対応した支援制度の拡充

人は誰でも、人生の各ステージに対応して色々な行事（冠婚葬祭）がある。GLA会員も当然ながら様々な年齢層から成るので、GLAはその面でも会員を支援するための制度を次第に整えてきている。すなわち、人生の始まりに際して行う「命名の儀」に始まり、「結婚式」、「金婚式」、人生の卒業式ともいえる「葬儀」⁶¹、そして亡き魂を供養する「法要」（特別供養⁶²）などである（GLA 2016: 14-15）。こうしたなかで、GLAは会員の人生の足跡を後世に伝え遺すため「人生祈念館の奉納の儀」というユニークな制度とそのための建造物を創設した。これに関しては、独自のかつ現代的な要素が多数織り込まれており、研究者や他教団からも注目されているので、以下説明を加えたい。

人生祈念館の創設とその意義

前述したとおり、松岡（2018）はGLAの「聖地と墓地」に焦点を合わせ、宗教人類学の観点から詳細かつ興味深い考察を行っている。その論文は「新宗教の聖地は教団

⁵⁹ 『G.』2020年5月号39ページ、46-51ページ。

⁶⁰ <https://www.gla.or.jp/post/t20200513-1/>

⁶¹ GLAの死生観、葬儀、特別供養については、山田・井口（2018）に詳しい記述がある。

⁶² あの世とこの世をつなぐ窓が開かれ、通常ではありえない、次元を超えた魂の邂逅が起こる供養（GLA 2014:31）。

図表 4 人生祈念館



- (注) 1. <https://www.gla.or.jp/about/yatsugatake/> (GLA の許可を得て転載)
2. 松岡 (2018 : 図 1、113 ページ) にもほぼ同じ写真が掲載されている。

の世界観や教義を表象する [場合が多いので、いのちの里の場合それが] いかん GLA の世界観を表しているか」 (松岡 2018 : 107) という視点からの分析である。

松岡 (2018) では、まず GLA の教義のあらましが説明され (本稿 21 ページの (4) として前述)、次いで「GLA 八ヶ岳いのちの里」 (山梨県、以下「いのちの里」) において 2012 年に竣工した「人生祈念館」が多面的に取り上げられる。すなわち、その建物と環境、ランドスケープのデザイン専門家チームが描いたビジョン、日本の伝統的な宗教施設との異同、この聖地のユニークさ、などが明らかにされ、最後に、心のコントロールを重視する教団 [GLA] における聖地の意味が考察されている。

「いのちの里」には、すでに「二つの講堂、会員が宿泊するためのバンガロー、研修センターなどの施設がある」 (同 : 113) が、それらの中心となるべく人生祈念館が新設された (同 : 114)。階段を上がっていくと (図表 4) 「円のモザイクの『地上の星』と、芝生が敷きつめられた『太陽の広場』が現れる (中略)。そしてその先に、あたかもオフィスビルのような外観を持つガラス張りの『人生祈念館』が建っている」 (同 : 114) との印象が述べられている。

このような聖地をつくるに際しては、全体のランドスケープのデザイン専門家チームが建築家の立場から深く関与し、「『心を見つめる』『心を磨く』『心を伝える』の 3 つを設計にあたってのイメージコンセプトとして設定」 (同 : 115) したことが

重要であったと評価している。そして、このチームは「いのちの里」全体を「自然と響きあう祈りの場」と考え、「自然との連続性」を強調した（同：116）ことが大きな特徴であった。これにより「いのちの里」は「教義の学習や実践を通しては超越的な存在とは何かややわかりにくい GLA の会員たちに、超越的な存在を意識させる自然の中の空間を提供することになった」（同：118）と評価している。

さらに「日本の伝統的な宗教施設は、奥へ奥へと向かう空間構造を持っている」（同：114）ことに言及するとともに、「[人生祈念館に至る道も] なだらかな斜面を登っていった最後に人生祈念館が現れる。それは奥へ奥へと入り込む道程であり、いのちの里が日本の伝統的な宗教施設の空間構造を踏襲している」（同：114）ことに注目している。そして人生祈念館では「[地階に相当する] 入り口から螺旋状の回廊を通過して聖堂へ至るのだが、この螺旋が GLA の説く『円環的人生観』⁶³を象徴しているとされる」（同：114-115）点にも注目、GLA の教義が聖堂に生かされているとしている。

人生祈念館の1階は聖堂である。そして地階には人生記録の奉納室および出会い室、ならびに納骨室がある点にとりわけ注目している（同：119）。地階に奉納される第一は「人生記録」である。これは、人生回帰の書（自分の人生史）、人生の葉（自分の人生を振り返ったうえで子孫や後世の人に送るメッセージ）、写真などから成り、全体が15分程度に映像化されたものである（同：119）。法要などに際しては、出会い室において子孫等がこれを視聴することができる（同：119）。そして、奉納される第二は、その人生を支えた肉体の形見である「遺骨」（の一部）である（同：119）。このように「聖地の中に一般信者の納骨堂を持つ新宗教教団は管見の限りでは GLA だけである」（同：119）とその斬新さを評価している⁶⁴。

つまり GLA は、「円環的人生観」を説く一方、このような奉納の仕組みを作ることによって「宗教に奥行きを与えている」（同：120）。そして「会員による人生祈念館への遺骨や人生記録の奉納は、個人主義的傾向そして現世志向をさらに推し進めているととらえることができる」（同：122）として GLA の特徴を総括している。

⁶³ 人は誰もが永遠の生命を抱き、転生を繰り返しながら、魂の深化・成長を果たしたいと願って生まれてきた存在であるという人生観（高橋 2005：135）。

⁶⁴ 人生祈念館は、人生記録と遺骨を「人生の記念碑」として預かることを通じて、一人ひとりの「人生の挑戦」を讃え、後世に伝え遺すものである（『G.』2017年4月号、48-55）。

(4) 社会の専門職域における共感者の増大

GLAが進める以上のような実践哲学は、会社員、主婦など一般に共感を得ているだけでなく、とくに各種の専門職に就いている人々の間で共感者が増えているのが近年の特徴である。

例えば、高橋の講演会はこれら第一線の人々によって支持され、推薦されている⁶⁵一方、主催者はそうした専門職に向けたセミナーの開催も積極化させている⁶⁶。また、この実践哲学によって自己啓発し、所属組織や社会に影響を与えている事例も非常に多い⁶⁷。特に医療関係では「トータルライフ医療研究会」が30年前に組織され、季刊誌「Total Life Medicine」を発行しているほか、毎年「トータルライフ医療学術集会」を開催し、新しい医療のあり方を多面的に追求している⁶⁸。

4. 発展の理由

以上みたように、この実践哲学は一層体系化され、科学の成果も取り入れて充実するとともに、共感者、支援者が増えてきた。なぜそれが可能となったのであろうか。それは三つの理由によると筆者は考えている。第一は、その推進者である高橋の思想家・宗教家としての力量である。第二は、この実践哲学の科学性と実証性である。そして第三は、この実践哲学がその核心に持つスピリチュアリズム（スピリチュアリティ）だと思われる。このうち第二および第三の特徴は、現代性ならびに先端性を示すものであり、この実践哲学をとりわけユニークなものとしているのではなかろうか。

⁶⁵ 例えば「2018 高橋佳子講演会」の案内冊子においては、保岡興治（法務大臣2回）、加藤眞三（慶應義塾大学看護医療学部教授）、徳田安春（軍星沖繩臨床研修センター長）、ウィリアム・ブルックス（米ジョージア・ホプキンス大学特別招聘教授）の各氏らが推薦の言葉を寄稿している。また2019年のそれにおいては、同様に二階俊博（衆議院議員・自民党幹事長）、瀬戸皖一（総合南東北病院口腔がん治療センター長）、マイケル・デンハム（英プリマス大学名誉教授・脳科学者）、工藤泰子（気象予報士・理学博士）の各氏による推薦文が掲載されている。

⁶⁶ 例えば「第3次 The Gate Series Seminar」（前出脚注6を参照）の募集人数と参加条件は次のように表示されている。募集定員は、経営350名、医療320名、教育270名。経営の参加条件は「社員10名以上の企業の代表または役員」、医療は「医療の国家資格を有し、現在現場を持っていること」、教育は「原則として、現在教育の現場を持ち、子供たちを教えていること」。

⁶⁷ 例えば、実践者の事例を挙げた前掲図表2（7ページ）では、医師、経営者、科学者、政治家、歌手など多岐に亘っている。

⁶⁸ 第28回大会は「魂の可能性を引き出す医療への挑戦-AIの時代に求められる医療を拓く」をテーマに2019年11月23日に東京で開催された。当日配布された「第28回トータルライフ医療学術集会抄録集」（全54ページ）にはシンポジウム、論文、講演など約30件の要旨が掲載されている。

(1) 思想家・宗教家として力量

この実践哲学が発展している第一の理由は、高橋が思想家・宗教家として類例のない力量を持っているうえ、高橋自身が実は実践哲学の実践者として行動してきたことによるのではなかろうか。

ここ15年来、この実践哲学の体系化、科学化、充実化が着実に図られてきたのは、その著作にも現れているとおり、高橋の卓越した力量とエネルギーを抜きにして考えることは難しい。そして、その実践団体であるGLAを統率し発展させたのも、ユニークなリーダーシップにある、といえるのではないか。具体的には、高橋本人が実践哲学を実践することによって組織の統率と発展を導き、そして理解者を増やしてきた面が強いと思われる。それは、トップが強い権限を発揮するトップダウン方式、あるいはそれを拡大したツリー構造 (tree structure) の組織による対応ではない。沼田 (1995:158) がつとに指摘したように、GLAは高橋の下に「セミ・ラティス構造」(例えば人体のようにそれぞれの器官が主体的な機能を持ちながらしかも相互補完的に関わりあうことができる構造)⁶⁹をもって組織運営がなされてきた点に特徴がある。

高橋のこのような力量と人間観 (そして会員に対する対応) は、高橋の組織統括ぶりにおいてだけでなく、GLAが会員の自己研鑽において採用してきた方針にも明確に表れている。ちなみに、新入会員のための案内冊子をみると、そこでは「GLAの会員として何よりも大切にしたいのは、高橋先生に学ぶという姿勢です (中略)。先生が、時代・社会をどう洞察し、どうお一人お一人に関わり、どう問題解決への道を行かれるのか、直に学んでいただきたい (中略)。先生は、GLA会員が倣うべき、全人的な最高のモデルでもあるのです」(GLA 2016: 8) と会員の心得が説かれている。

高橋のこうしたリーダーシップが見事に実証された一例は、2020年の年初から春にかけて日本を襲った新型コロナウイルスの感染拡大に際してのGLAの対応である。高橋は、その危機が持つ負の側面を最小化するだけでなく、それが問いかける可能性をむしろ活かし、GLAが従来進めてきたインターネットによるオンライン研鑽システムを一挙に充実させるとともに多様化することに成功している (前述 27 ページの最終段落～28 ページを参照)。

⁶⁹ 前出脚注 33 を参照。

(2) 科学性、実証性

この実践哲学が発展を続けている第二の理由は、それが科学性、実証性を持っていることであろう。そうした特徴は、教義、組織とその活動形態、会員の研鑽方式、現代社会の観察など、多くの面において明瞭にうかがわれる。

まず、この実践哲学の教義や研鑽方式は、前述したとおり、現代心理学に親和性を持つ（人間の知覚と行動についての理解、人格の4類型、カウンセリング的ふりかえり技法など）。さらに、それは意思決定論、行動経済学、経営学、組織論、統計学、インターネット科学など、幅広い科学の領域（そのことを直接明示しているわけではないが）を踏まえたものとなっている。こうした特徴は「最先端の科学的学説とも関連する知的・合理的説明をも行っている」（沼田 1995 : 175）と早い段階において指摘されていたことであり、近年はそれがさらに顕著になっていると理解できる。

ちなみに、高橋は近著において「『最高の人生』とは、これまでとは別の人生を探し当てることではありません。今ある人生のなかに眠っている最高の可能性を結晶化させることです」（高橋 2018a : 29）と述べているが、これは当該書籍がリスクな一発勝負を提案しているのではなく、科学的根拠と実績に基づく確かな自己啓発の提案であることを自信を込めて述べたものと理解できよう。

また高橋の思想においては「仏教とスピリチュアリズムも重要な構成要素であり、現代科学と東洋神秘主義の融合」（沼田 1995 : 175）という特性を持つことも、日本人にとって受け入れ易くしている。さらに、GLA の組織や研鑽に関しては、柔軟で現代的な方式を採用していることは前述したとおりである。

一方、人間観としては、個性重視を基本としているほか、研鑽システム（プロジェクト活動）における会員の平等性と自発性の尊重（沼田 1995 : 159）、集団行動よりも個人主義的な傾向（松岡 2018 : 122）など、いずれも現代的な理念に立脚している。さらに、現代社会に対する洞察（前述した唯物主義・刹那主義・利己主義という捉え方）⁷⁰にも鋭敏さがうかがえる。

実践哲学を推進するのは、出版社やセミナー主催社でなく実は GLA と称する「宗教法人」である⁷¹（この詳細は次節で論じる）。それが標榜するのは「魂の学」であるが「その特徴は、何と云っても、具体的な問題を実際に解決し、内なる願いを実現し

⁷⁰ 前出脚注 20 を参照。

⁷¹ 前出脚注 22 を参照。

てゆく現実的な力にあります。それは、未来を変える実践哲学なのです」(GLA 2016 : 10) と謳っている。宗教法人が、来世のことよりもこのように現世的、現実的なモットーを前面に掲げるのはおそらく異例である。こうした発想は、高橋による著書の奥付において、著者の資格を「人生と仕事の総合コンサルタント」という表現によって表現されていることに現れている。

(3)スピリチュアリティ

実践哲学が現代性と先端性を持つという特徴は、上記の科学性と実証性についてだけでなく、もう一つ別の面についてもいえる。それは、この実践哲学が現代的な「スピリチュアリティ」(spirituality, spiritualism: 霊性あるいは精神性)に深く関わっていることである。

前述したように、GLA の自己ふりかえり技法は「スピリチュアルな心の技法」(渡邊 2011 : 43) と理解され、また高橋による会員の対話指導は「スピリチュアル・カウンセリング」(同 : 48) と性格付けられている。そして、GLA の活動は「宗教運動として捉えるよりも、スピリチュアルな運動のなかに含めて考えた方が、理解しやすいかもしれない」(島田 2007 : 202) という見方もなされている。さらに、GLA の教義には「仏教とスピリチュアリズムも重要な構成要素」(沼田 1995 : 175) として含まれるとされ、また高橋による早期の著書『サイレント・コーリング』(1991 年) は「新霊性⁷² 運動 [スピリチュアリズム] と親和性を有する著書」(沼田 1995 : 151-152) と評されている。このように、この実践哲学はスピリチュアリティあるいはスピリチュアリズムと表現される場合も少なくなく、暗黙のうちに宗教と区別して捉えられているように見える。

一方、この実践哲学を推進している組織 GLA は、上記のとおり宗教法人であり、このため、それを対象とした前述書籍の表題として「新宗教」(沼田 1995 ; 島田 2007)、あるいは論文表題として「新新宗教」(渡邊 2011 ; 松岡 2018) とそれぞれ表現されている。果たして、スピリチュアリティ (あるいはスピリチュアリズム) と宗教 (あるいは新宗教ないし新新宗教) は異なるものなのか。もし異なるのであれば、どのよ

⁷² スピリチュアリティは、日本語で霊性と表現されることも少なくないが、両者の語感には相当大的な隔りがある。この点を含めたスピリチュアリティの議論は、別稿 (岡部 2020b) および Wikipedia “Spirituality” を参照。

うに異なるのか。その場合、スピリチュアリティは何を意味するのか。これらについては議論すべき点が多いので、別稿（岡部 2020b）に譲る。ただ、ここではポイントとなる次のことを指摘しておきたい。

スピリチュアリズムと宗教

第一に、スピリチュアリティと宗教は、ともに霊的な成長（生きる動機の追求やその実践、人間や世界の根源的理解など）を希求する点で重複する要素を多く持つことである。第二に、宗教においては何らかの組織（宗教教団）に所属してそれらを追求する場合が多く、そこでは儀式や象徴が重視される。一方、第三に、スピリチュアリティは既成の宗教を特徴付けるそうした側面（伝統や束縛）から開放され、霊的成長を個人的に追求することを重視する運動ないし文化現象を指す場合が多いことである。そして第四に、ここ 20～30 年をみると、アメリカや日本では自由主義と個人主義という時代の流れを反映して宗教離れの傾向が続いており、「宗教的ではないがスピリチュアル」（spiritual but not religious: SBNR）という新しい風潮ないし文化現象が強まっていること⁷³、である。

つまり、近年の特徴は、人々が霊的（スピリチュアル）な心あるいは生き方の支えを求める場合、制度的に拘束されないかたちで個人的に研鑽するというスタイルが好まれるようになってきている。こうした状況を前提にすると、本稿で採り上げた実践哲学はその条件を充足する面を多くもっており、それが歓迎されて多くの共感者を得ている面も大きい、と理解できる。

例えば、この実践哲学は、その実践団体である GLA（宗教法人）の会員にならなくとも講演会へ参加することができ、また高橋の著書（さらにはインターネット）によって学べることも多い。そして、会員になっても、比較的一般的な規定の順守（組織の目的を逸脱した行動をしない等）以外に何か特定のことをしなければならないということない⁷⁴。そして組織の構造は、前述したとおりフラットであり権限主義的などころがなく、研鑽方法も特定の方式が強要されることがなく自由度が高い。

⁷³ Mercandante (2014 : 1-19)、Wikipedia “Spiritual but not religious”。宗教学者・島菌 (2012 : 20) は、これを新霊性運動(new spirituality movements)、新霊性文化 (new spirituality culture)、あるいは新しいスピリチュアリティ (new spirituality) などと呼んでいる。 ;

⁷⁴ GLA(2014 : 89)。GLA 会員規定は GLA (2014 : 92-93)、あるいは『G.』 (2020 年 5 月号 : 82-83) を参照。

つまり、この実践哲学においては、現代社会にマッチした個人主義的な方法で自己研鑽を行う機会が提供されている。換言すれば、研鑽の目的は確かに宗教と大きな差異がないともいえるものの、研鑽の仕組みや組織は伝統的な宗教を超えた現代的なものになっている。その点において、この実践哲学は「宗教的ではないがスピリチュアル」（SBNR）な内容と場を提供している。

スピリチュアリズム：敷居が低い現代的な宗教

ただ、この実践哲学を推進する組織は、前述したとおり宗教法人（GLA）である。またそれを主宰する高橋も、教義に関しては宗教の要素（すなわち信仰）を含むことを明言している。すなわち高橋によれば「信仰を持つとは（1）人生を生きる指針を持つ、（2）人間観・世界観を持つ、（3）Something great と共に生きる」⁷⁵ことであり、GLA はそれを推進していると述べている。すなわち（1）は生き方のポリシー（哲学）を持つこと、（2）は人間とはどんな存在か、世界はどう造られているのかを理解すること、そして（3）は人知を超えた未知なる世界を感じて謙虚に生きていくこと、としている。このうち（1）と（2）は知識ないし科学的探求が対象としうる領域であるが、（3）は明らかにそうでなく宗教（信仰）の領域に入る。

また、この実践哲学の推進組織である宗教法人 GLA も、新入会者向けの冊子において Q & A 形式をとってこれに関連した興味深い指摘をしているので、それを引用しよう。「問：GLA は、仏教系ですか？ キリスト教系ですか？」。それに対して次の回答を記載している。「（中略）[仏教もキリスト教も] 当時の社会の中で、人としてどのように生き、どのように問題を解決してゆくか[が説かれた]教で、それらは当時の社会状況や人々が背負う条件の中で、最高の生き方ともいえるモデルでした。釈迦の願いも、イエスの願いも、そして高橋先生が願われていることも、その大本は同じです。そして今、先生は絶えずその源に根ざしながら、時代という条件を超えて、人間が魂の存在であることを証され、世界に満ちるあらゆる問題を解決へと導く智慧と方法を説かれています。その意味で、GLA は[魂の学ないし実践哲学を] 宗教を超えた宗教、いわばスーパーレリジョンだと受止めています」（GLA 2016：18）。

以上のように、この実践哲学は、その推進組織が宗教法人であるほか、教義に宗教

⁷⁵ 公開セミナー（第2次 The Gate Seminar 第3回、2019年7月15日）において高橋が講演の際にスクリーンで提示したものを筆者が自分のノートに記載。

の要素が含まれることを明言している。その一方、教義における多くの内容、研鑽の目的、研鑽システム、組織運営などの面においては、伝統的な宗教とは相当大きく異なる現代的な側面が多く、スピリチュアリティの要素を多く含んでいるのが特徴である。その意味で、まさに上記のとおり「宗教を超えた宗教、いわばスーパーレリジョン」という表現が妥当するといえよう。

では、その発想をさらに進め、この実践哲学を宗教とは異なるスピリチュアリティあるいはスピリチュアリズムという独自のものと位置づけるべきであろうか。確かに「20世紀最後の四半世紀になって、宗教とは独立したものとしてスピリチュアリティを捉える考え方が広がってきた」（島藪 2012：5）ので、そのような発想もありえよう。しかし「宗教とスピリチュアリティは、密接に関わりあい [を持っており] 同じことがらをシステムに力点を置いていうか、個人に力点を置いていうかの程度の差ともみなせる」（島藪 2012：5）ので、宗教とスピリチュアリティを対立的に捉えるのは本質を歪めるおそれがある。また、それはあまり建設的な議論にはならないと筆者には思われる。

とすれば、この実践哲学は、一方で幾つかの面で確かに宗教の要素を持ち、他方では「崇拝対象も存在せず、最先端の科学的学説とも関連する知的・合理的説明をも行っている」（沼田 1995：175）という実体を重視するならば、これを「間口が広く、敷居が低い現代的な宗教」と表現するのが適切ではなかろうか。ちなみに、宗教学者・島藪は「キリスト教における『平安の祈り』⁷⁶はキリスト教以外の多くの人々にも自然に受け入れられており、この部分は『敷居が低い一つの宗教』とみることもできる⁷⁷と捉えている。

現代では、宗教に組織的な縛りがある側面が敬遠される傾向にある一方、スピリチュアルな側面を含めて本来的な人間の生き方は多くの人々が求めるようになっているのではないか。とすれば、それを希求する現代人にとって、この実践哲学は求められる条件を良く満たしているように思われる。

以上

⁷⁶ 「神よ、私にお与えください。変えることができないものは、それを受け入れる平静な心を。変えることができるものは、変える勇気を。そしてこれら二つを見分ける知恵を」。これは、米国の神学者レインホルド・ニーバーによって1943年に書かれた祈りの言葉（Serenity Prayer）として広く知られている（Sifton 2003：10）。

⁷⁷ 「信仰を持つ医療者の連帯の会」第1回大会（2018年10月28日、於慶應義塾大学）における基調講演者としての発表。

【引用文献】

岡部光明（2012）「経済学的世界観の強さと限界—経済学における人間の行動前提の再考そして対応方向—」、明治学院大学『国際学研究』41号、37-49ページ。

<<http://hdl.handle.net/10723/1133>>

岡部光明（2017）『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして』日本評論社。

岡部光明（2018）「アマルティア・センの潜在能力論とその発展的応用」、2019年総合人間学会発表論文、明治学院大学学術論文公表ウェブサイト。

<<http://hdl.handle.net/10723/00003411>>

岡部光明（2019）「経済学の成熟をめざして：追加すべき三要素」学術研究ネット主催シンポジウム発表資料（11月25日、於中央大学）、明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト、

<<http://hdl.handle.net/10723/00003515>>

岡部光明（2020a）「自己啓発は『より良い人生』をもたらすか：関連書籍の比較分析」、明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト（近刊）。

岡部光明（2020b）「『宗教的ではないがスピリチュアル（SBNR）』という思想について」、明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト（近刊）。

鎌田東二（2016）「宗教の未来と可能性」、鎌田東二（編）『スピリチュアリティと宗教』講座スピリチュアル学7、終章、ビイング・ネット・プレス。

G L A（月刊誌）『G.』G L A総合本部出版局。（国立国会図書館書誌ID：027225070）。

G L A（2014）『ようこそGLAへ—新しく入会したあなたへ』第4版、G L A総合本部出版局。

G L A（2016）『新入会員のみなさまへ はじめてのG L Aガイド』G L A総合本部出版局。

島菌 進（2001）『ポストモダンの新宗教—現代日本の精神状況の底流』、東京堂出版。

島菌 進（2012）『現代宗教とスピリチュアリティ』現代社会学ライブラリー8、弘文堂。

島田裕巳（2007）『日本の10大新宗教』幻冬舎新書061、幻冬舎。

鈴木宣弘（2013）『食の戦争—米国の罠に落ちる日本』文春新書927、文藝春秋。

鈴木宣弘（2016）『悪夢の食卓—TPP批准・農協解体がもたらす未来』KADOKAWA。

高橋佳子（1991）『サイレント・コーリング Silent Calling—21世紀衝動』三宝出版。（2010年に三宝新書としても刊行）

高橋佳子（1994）『祈りのみち—至高の対話のために』三宝出版。

高橋佳子（2000）『千年の風』三宝出版。

高橋佳子（2001）『新しい力—「私が変わります」宣言』三宝出版。

- 高橋佳子 (2002) 『「私が変わります」宣言ー「変わる」ための24のアプローチ』三宝出版。
- 高橋佳子 (2003) 『人生で一番知りたかったことービッグクロスの時代へ』三宝出版。
- 高橋佳子 (2004) 『いま一番解決したいこと』三宝出版。
- 高橋佳子 (2005) 『あなたが生まれてきた理由』三宝出版。
- 高橋佳子 (2006) 『新 祈りのみちー至高の対話のために』三宝出版。
- 高橋佳子 (2007) 『GLA 会員の基本ライフスタイル』GLA テキストブックシリーズ1、GLA 総合本部出版局。
- 高橋佳子 (2008) 『12の菩提心ー魂が最高に輝く生き方』三宝出版。
- 高橋佳子 (2009) 『Callingー試練は呼びかける』三宝出版。
- 高橋佳子 (2010) 『魂の冒険ー答えはすべて自分の中にある』三宝出版。
- 高橋佳子 (2011a) 『魂の発見ー時代の限界を突破する力』三宝出版。
- 高橋佳子 (2011b) 『果てなき荒野を越えて』三宝出版。
- 高橋佳子 (2012) 『彼の地へー3.11からのメッセージ』三宝出版。
- 高橋佳子 (2013a) 『希望の王国ー地図にない国を求めて』三宝出版。
- 高橋佳子 (2013b) 『1億総自己ベストの時代ー人生の仕事の見つけ方』三宝出版。
- 高橋佳子 (2014) 『魂主義という生き方ー5つの自分革命が仕事と人生を変える』三宝出版。
- 高橋佳子 (2015) 『未来は変えられる！ー試練に強くなる「カオス発想術」』三宝出版。
- 高橋佳子 (2016) 『運命の逆転ー奇跡は1つの選択から始まった』三宝出版。
- 高橋佳子 (2017a) 『あなたがそこで生きる理由ー人生の使命の見つけ方』三宝出版。
- 高橋佳子 (監修) (2017b) 『いざというときのベストチョイスー突然の病を迎え撃つために』ベストチョイスシリーズ[1]、三宝出版。
- 高橋佳子 (2018a) 『最高の人生のつくり方ーグレートカオスの秘密』三宝出版。
- 高橋佳子 (監修) (2018b) 『いざというときのベストチョイスー人生の卒業式を輝かせるために』ベストチョイスシリーズ[2]、三宝出版。
- 高橋佳子 (2019a) 『自分を知る力ー「暗示の帽子」の謎を解く』三宝出版。
- 高橋佳子 (監修) (2019b) 『いざというときのベストチョイスー介護を通して自らと家族が輝く』ベストチョイスシリーズ[3]、三宝出版。

沼田健哉 (1995) 「GLA の研究」『宗教と科学のネオパラダイム—新新宗教を中心として』、113-179 ページ、創元社。

松岡秀明 (2018) 「模索する新新宗教—聖地と墓地をめぐる」、堀江宗正 (編) 『いま宗教に向きあう 1 現代日本の宗教事情〈国内編 I〉』第 4 章、106-123 ページ、岩波書店。

山田弘子・井口清吾 (2018) 「人間を魂としてみる死生観に基づく GLA の葬制と看取り」〈シンポジウム「諸宗教の死生観と看取りの実践」〉、東洋英和女学院大学 死生学研究所編『死生学年報 2018 生と死の物語』、209-222 ページ、リトン。

渡邊典子 (2011) 「『心理学主義化』する新新宗教の教説—GLA を事例に—」『一神教世界』2 号、同志社大学一神教学際研究センター、43-59 ページ。
<<http://doi.org/10.14988/re.2017.0000015649>>

Mercandante, Linda A. (2014) *Belief without Borders: Inside the Minds of the Spiritual but not Religious*, Oxford University Press.

Sifton, Elisabeth (2003) *The Serenity Prayer: Faith and Politics in Times of Peace and War*, W. W. Norton & Company.

Takahashi, Keiko (2011) *The Reason Why You Were Born as You*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2014) *The Path of Prayer: For a Supreme Dialogue*, Revised Edition, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2015a) *Discovery of the Soul: Power to Break Through the Limitations of the Era*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2015b) *Your Best for a New Era: Finding Your Purpose in Life*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2015c), *Beyond the Vast Wasteland*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2015d), *To the Land Beyond, A Message from the Disaster of March 11*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2015e), *Realm of Hope, Seeking an Uncharted Land*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2017) *The Soul Doctrine as a Way of Life: 5 Inner Revolutions to Change Life and Work*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2018a) *We Can Change the Future: Method for Engaging Chaos to Find the Strength to Face Life's Trials*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Takahashi, Keiko (2018b) *Reversing Destiny: Miracles Started from One Choice*, Tokyo: Sampoh Publishing.

Wikipedia “Self-actualization”. <https://en.wikipedia.org/wiki/Self-actualization>; accessed on 2019/11/5.

Wikipedia “Spiritual but not religious”. https://en.wikipedia.org/wiki/Spiritual_but_not_religious; accessed on 2019/11/11.

Wikipedia “Spirituality”. <https://en.wikipedia.org/wiki/Spirituality>; accessed on 2019/11/5.